

エンパワメント型アーツセラピー実践者の セルフアセスメントの有効性と課題

*Effectiveness and Issues of Self-Assessment
for Empowerment Arts Therapy Practitioners*

▶ 2023年2月17日 SWIM研究会

小村みち（大阪公立大学）*

石原みどり（ATASラボラトリー）

兼子 一（神戸医療未来大学）

林 章浩（静岡理工科大学）

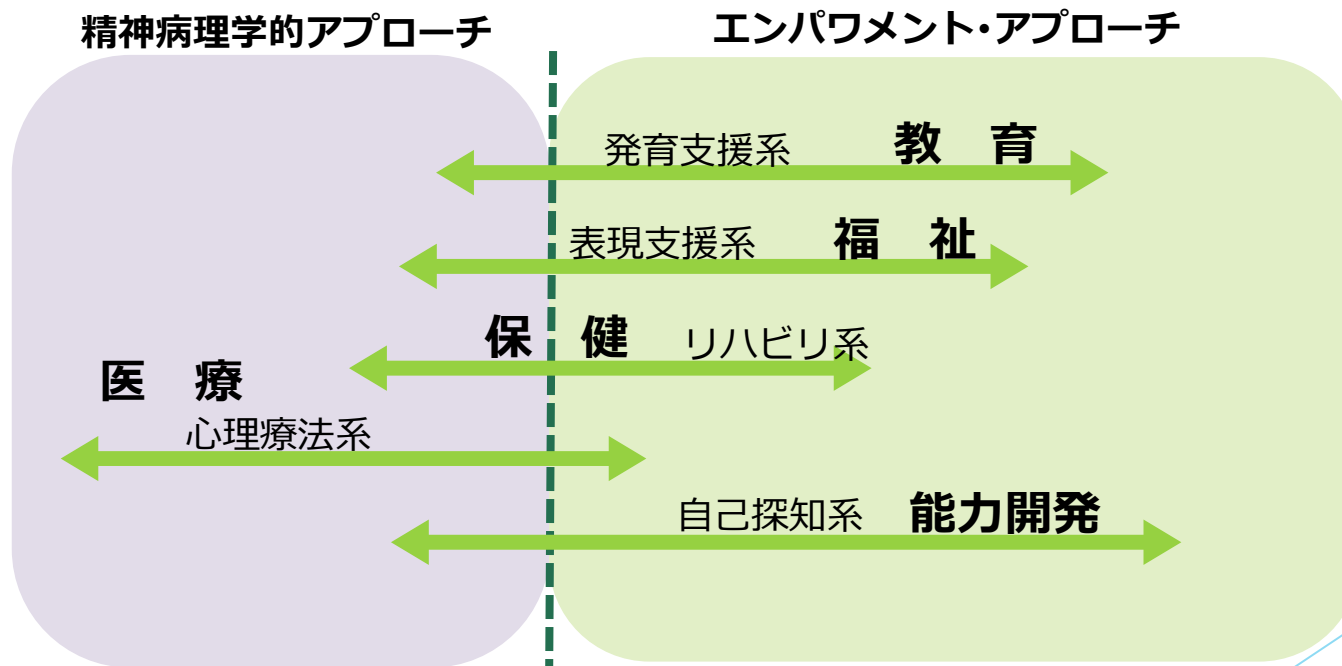
Overview

Section	Contents
1. はじめに	<ul style="list-style-type: none">• エンパワメント型アーツセラピー(以下, EAT) 概要• 研究の目的 (解決すべき課題)
2. セルフアセスメント ツールについて	<ul style="list-style-type: none">• ツールの構成• 各ツールの概要• 改善プロセス
3. 試行事例の検討	<ul style="list-style-type: none">• 調査の概要• 調査結果の検討
4. 結論	<ul style="list-style-type: none">• 有効性• 今後の課題

1.1 EATの概要—PATとEAT

- ▶ **PAT** (Psychopathological Arts Therapy, 精神病理学的アートセラピー)
 - 臨床的, 治療的なアートセラピー (芸術療法)
- ▶ **EAT** (Empowerment Arts Therapy, エンパワメント型アートセラピー)
 - 多様な**市井のアートセラピー**を説明するための学術的な概念

EATはPATに比べ
方法や実践者が
多様



日本におけるアートセラピーの活動領域および5系統の相互関係

1.2 研究の目的

これまでの研究の経緯

1. 先行研究の成果に基づき、**EATセルフアセスメントツール**を作成
2. セルフアセスメントによるEAT実践者のケイパビリティ**改善プロセス**を提案



- ▶ **継続的なセルフアセスメント**がEAT実践者にもたらす効果を検証すること
- ▶ 本格的な検証調査に向けた予備調査として**ケーススタディ**を行うこと

2.1 セルフアセスメントツールの構成

1. マッピングシート

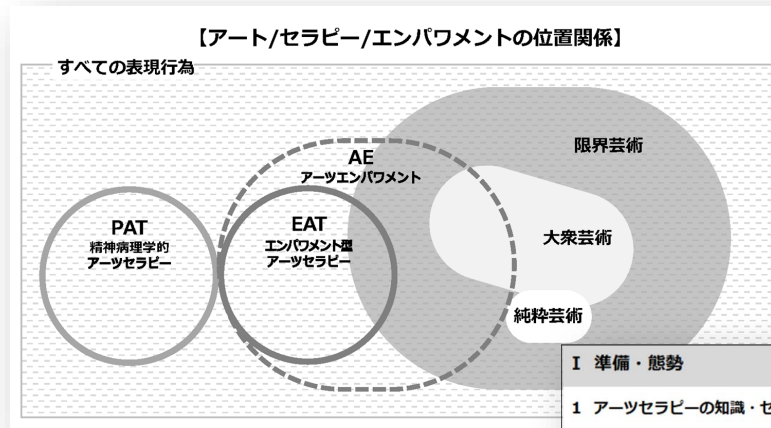
- 自分の活動領域をマークする

2. EAT活動評価シート

- 各項目を4段階で自己採点する

3. EATルーブリック

- EAT活動評価シートのチェックの際に基準として参照する



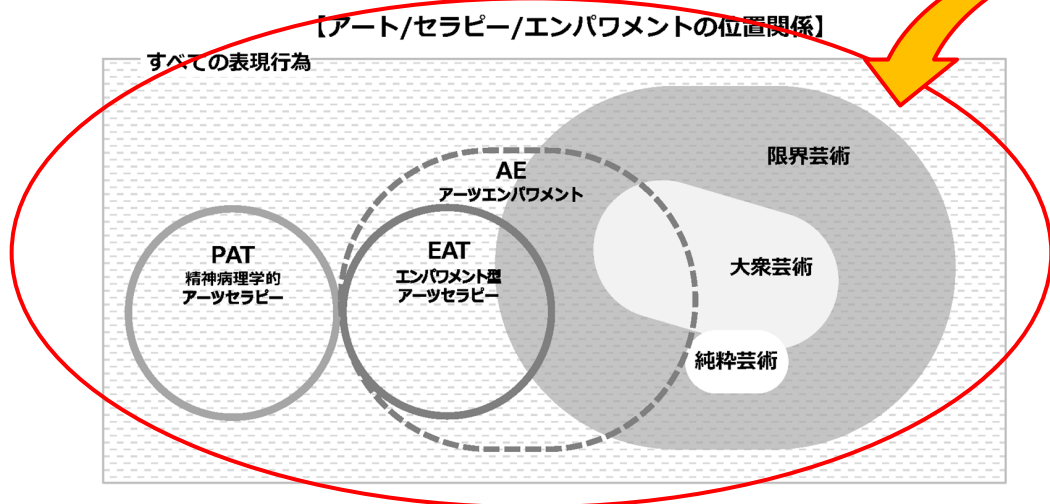
I 準備・態勢			
1 アーツセラピーの知識・セッションの技術		自己評点	平均値
①	アート（表現すること）が有するセラピー効果、セラピー機能について理解し、説明できる。	1・2・3・4	①～③の合計点
②	目的・ねらいに応じたアーツセラピーおよびアートの知識・技術を有している。	1・2・3・4	
③	アーツセラピーの歴史や、自分の専門領域以外のアーツセラピーの技法・特徴について知っている。	1・2・3・4	
④	自分の活動において必要なレベルの心理療法や精神療法、心理カウンセリングに関する知識・技術がある。	1・2・3・4	平均値
2 自己研鑽・自己理解			
⑤	活動に必要な専門的あるいは関連する知識・技術の向上を図っている。	1・2・3・4	⑤～⑥の合計点
⑥	自己評価を行っている。	1・2・3・4	

	1	2	3
知識	知識は部分的、断片的であり、体系的に学んだことがない。	ひとつの知識を学んでいる。	自分の主たる実践領域に関する知識があり、それらについて他ることができる。
スキル	実践経験がほとんどない、もしくはごく少ない。	習得した方法に基づいて、ひとりEATを実践することができる。	習得した方法に基づいて、安にEATを実践することができる。
心理的安全性	特段の安全対策を講じていない。実践の中で困ったことが起きることを想定していない。	自分自身の対応力を越える事態に対して、少なくともそれを認識し、何らかの対応を取ることができる。	心理的安全確保の必要性と重畳しており、そのための対策をすることができる。

5 安全対策	
⑮	対象者の保護
⑯	グループでの活動
⑰	対象者の心
6 情報・ネット	
⑱	スーパーユ
⑲	対象者の切
⑳	アーツセラ

2.2.1 マッピングシート

[アーツセラピーの5系統] および [PAT と EAT の違い] を参照しながら、【アート/セラピー/エンパワメントの位置関係】の図に自分の活動がカバーしている領域をマークしてください。



*** AE : アーツエンパワメント**
 地域アートなど地域やまちを活性化させるアート活動や、意図せずさまざまなセラピー効果をもつアート活動。プロ/アマを問わない。

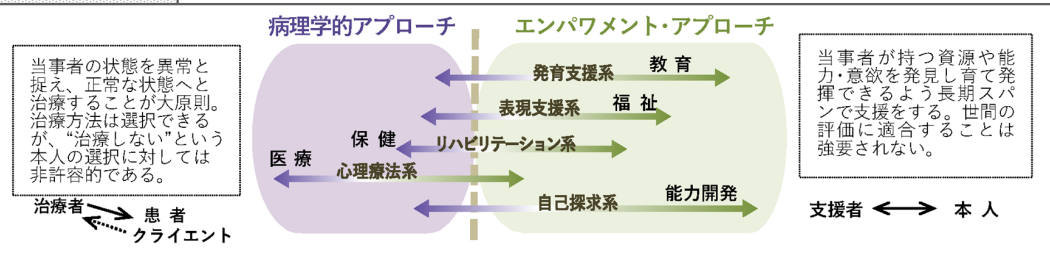
*** 限界芸術・大衆芸術・限界芸術**
 鶴見俊輔 (1922-2015) が提唱した考え方。「限界芸術 Marginal Art」とは非専門家によってつくられ非専門家によって享受されるものであり、アートと生活が浸透し合う広大な領域を形成している。それは「芸術の最初の形」であり、「純粋芸術・大衆芸術を生む力をもつ」とされる。また「純粋芸術」とは専門家によってつくられ、その分野に精通した専門的享受者によって享受されるもの、「大衆芸術」とは専門家と企業によって合作され非専門家=大衆に享受(消費)されるものである。 鶴見俊輔『限界芸術論』(1991,ちくま学芸文庫(初版1967,勁草書房))

分類・説明

アーツセラピーの5系統

心理療法系	専門的な診断と治療の必要な人が対象。問題・症状の緩和や治療の中心的あるいは補助的な手段として活用。目指す内容として自己探知系と重なる部分が多い。
自己探知系	比較的健康度の高い成人が対象。気晴らし・ストレス解消・保養・癒し・自己解放・自己発見・自己肯定・QOL向上などが主な目的。その他、問題に向き合う、精神疾患を予防するなど。心理療法系につながる場合もある。
リハビリテーション系	脳機能障害者や高齢者が対象。身体機能回復、症状の進行抑制・緩和・安定などを行うことが主な目的。リハビリテーションを補助する、あるいは牽引するものとして活用。心理面にも関わるが、基本的に心理療法とは異なる。
発達支援系	発達段階にある子ども・若者が対象。抑圧からの解放、自己表現の促進、自信の獲得、自己肯定感の向上などが目的。種々の障害児に対しては「療育」の一手段となる。いずれにも子育て支援の要素が含まれる。心理療法につながる場合もあるが、基本的に心理療法とは異なる。
表現支援系	知的障害や精神障害のために通常のコミュニケーションや社会生活が困難な人、あるいはそれらの症状の表れとして内発的に表現活動を行なう人を対象とする。非言語的な表現行為によって外部世界と接触・交流ができたり、充実した時間を過ごすことができたりすることで、QOLを向上させることが主な目的である。その結果としての制作物がアート市場に出る可能性が最も高い。心理面にも関わるが、基本的に心理療法とは異なる。

PAT と EAT の違い

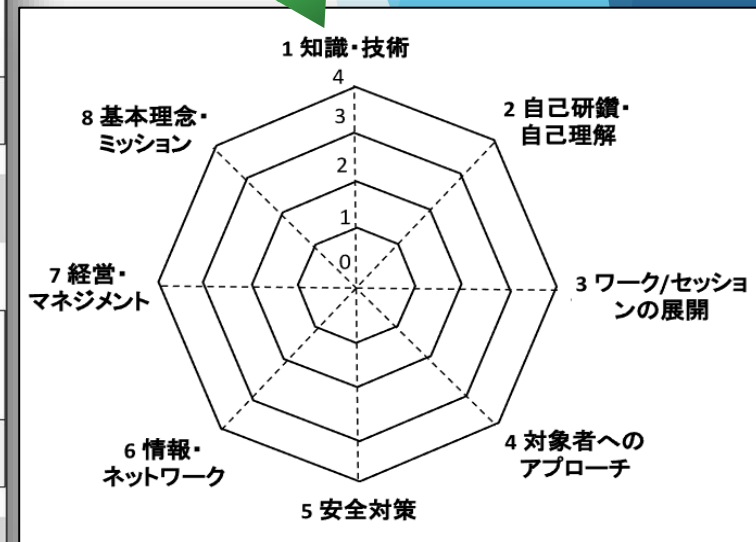


2.2.2 EAT活動評価シート

カテゴリー平均を
レーダーチャート
に記入

I 準備・態勢		
1 アーツセラピーの知識・セッションの技術	自己評点	平均値
① アート（表現すること）が有するセラピー効果、セラピー機能について理解し、説明できる。	1・2・3・4	①～④の 合計点
② 目的・ねらいに応じたアーツセラピーおよびアートの知識・技術を有している。	1・2・3・4	
③ アーツセラピーの歴史や、自分の専門領域以外のアーツセラピーの技法・特徴について知っている。	1・2・3・4	
④ 自分の活動において必要なレベルの心理療法や精神療法、心理カウンセリングに関する知識・技術がある。	1・2・3・4	
2 自己研鑽・自己理解		
⑤ 活動に必要な専門的あるいは関連する知識・技術の向上を図っている。	1・2・3・4	⑤～⑦の 合計点
⑥ 自己評価を行っている。	1・2・3・4	平均値
⑦ 自己の本質や性向を理解・把握し、自分が抱える心理的な問題については一定の整理や解決がついている。	1・2・3・4	
II 実践		
3 ワーク・セッションの展開		
⑧ 自己の活動の目的・ねらい、対象者（相手・クライアント）が明確である。	1・2・3・4	⑧～⑩の 合計点
⑨ 対象者の状況・ニーズに応じて目標を設定し、ワークやセッションを組み立てることができる。	1・2・3・4	平均値
⑩ 対象者の様子や状態に対し臨機応変にワークやセッションを進めることができる（必要な場合は変更や中断もする）。	1・2・3・4	
⑪ ワークやセッションの効果について計り、フィードバックしている。	1・2・3・4	
4 対象者へのアプローチ		
⑫ 対象者との心理的距離を考慮し、適切な関係を構築することができる。	1・2・3・4	⑫～⑭の 合計点
⑬ 対象者を多角的に理解するよう努めている。	1・2・3・4	平均値
⑭ 対象者が置かれている家庭環境、社会的環境、それに関係する制度・組織・サービスなどについての情報を得ようとしている。	1・2・3・4	

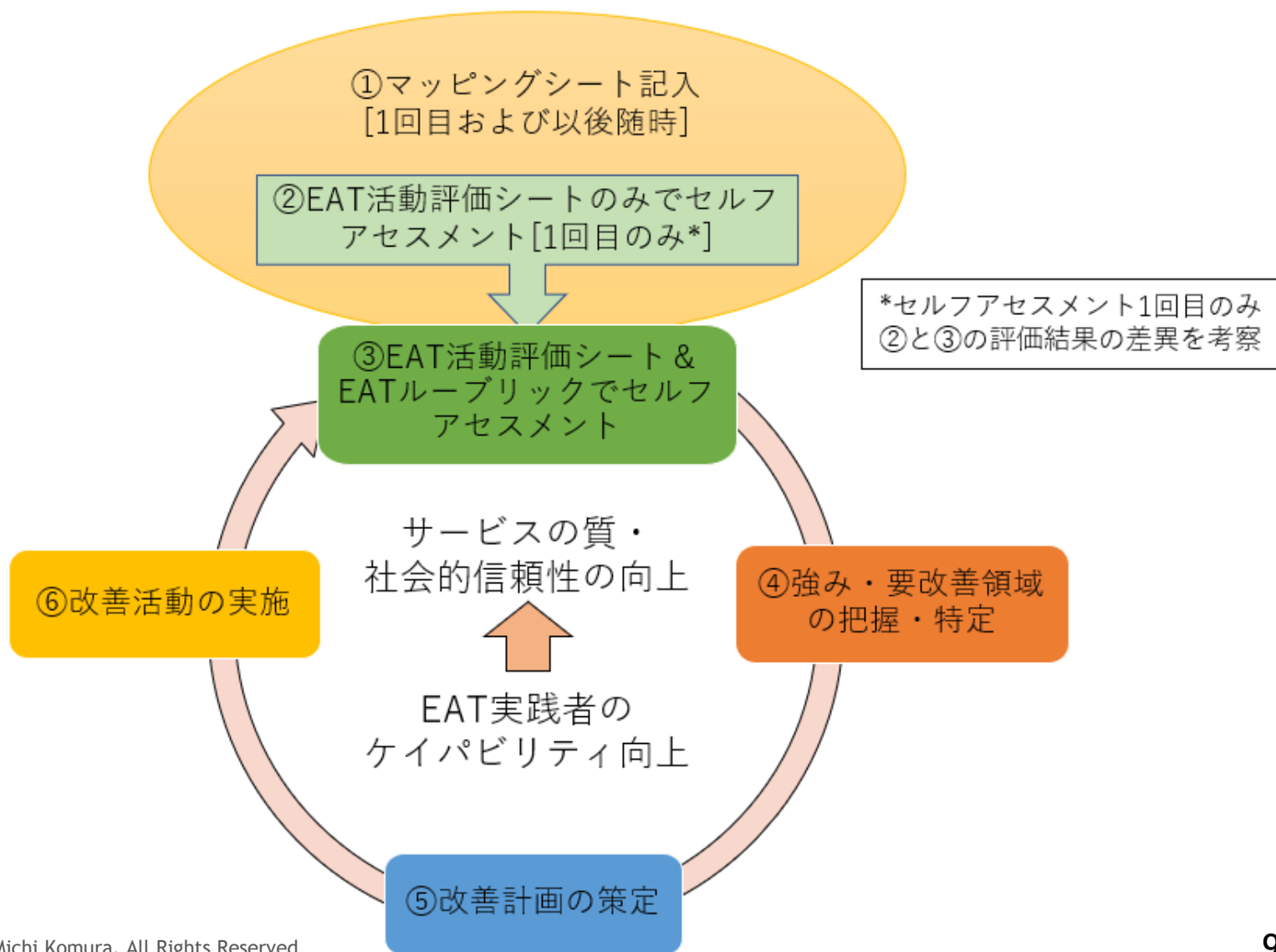
5 安全対策		
⑮ 対象者の個人情報や発言内容に関して守秘義務を守っている。	1・2・3・4	⑮～⑯の 合計点
⑯ グループでのワークやセッションにおいて、参加者の個人情報や発言内容に関して、守秘義務を守ってもらうよう確認している。	1・2・3・4	平均値
⑰ 対象者の心理状態や心理的变化に対し、必要があれば個別にフォローしている。	1・2・3・4	
6 情報・ネットワーク		
⑱ スーパーバイザーなど指導者あるいは相談できる人がいる。	1・2・3・4	⑱～㉑の 合計点
⑲ 対象者の状態やケースの状況に応じて適切な専門家や専門機関につなぐことができる。	1・2・3・4	平均値
⑳ アーツセラピーや自身の活動に関連する情報や知識を得るためのネットワークを築いている。	1・2・3・4	
III 運営方針		
7 経営・マネジメント		
㉑ 活動計画・収支計画を立て、継続的に活動を行っている。または、それを目指している。	1・2・3・4	㉑～㉓の 合計点
㉒ 活動内容に見合う対価・報酬を受け取っている。	1・2・3・4	平均値
㉓ 活動に係る経費は、活動の対価・報酬や助成金等で賄っており、持ち出しに頼っていない。	1・2・3・4	
IV 基本理念・ミッション		
8 基本理念・ミッション→アーツセラピーの本質・理念の追求		
㉔ 活動の基本理念や目指す理想が明確になっており、他者に説明できる。	1・2・3・4	㉔～㉖の 合計点
㉕ 自分のアーツセラピー活動の特徴が明確になっており、他者に説明できる。	1・2・3・4	平均値
㉖ アート（表現すること）の本質を追究する姿勢を持っている。	1・2・3・4	



2.2.3 EATルールブック

	1	2	3	4
知識	知識は部分的、断片的であり、体系的に学んだことがない。	ひとつおりの知識を学んでいる。	自分の主たる実践領域に関する十分な知識があり、それらについて他者に説明することができる。	自分の実践領域と関連する諸領域に精通しており、アーツセラピー全般に関しても体系的な知識を持ち、それらを他者に説明することができる。
スキル	実践経験がほとんどない、もしくはごく少ない。	習得した方法に基づいて、ひとつおりのEATを実践することができる。	習得した方法に基づいて、安全で効果的にEATを実践することができる。	習得した方法だけでなく、独自の方法を加味したり開発しながら、安全で効果的なEATを実践することができる。クライアントの状況に合わせて、自在に内容をカスタマイズすることができる。
心理的安全性	特段の安全対策を講じていない。実践の中で困ったことが起きることを想定していない。困った事態が起こった時には全く対応できない。	自分自身の対応力を越える事態に対して、少なくともそれを認識し、何らかの対応を取ることができる。	心理的安全性確保の必要性と重要性を認識しており、そのための対策を講じ、対応することができる。	心理的安全性の確保ができており、トラブル時には的確に対応できる。自分自身の対応力を越える場合の見極めが的確にでき、その場合は関係機関や他の専門家に繋ぐなどの適切な対応をすることができる。
自己理解	自分自身の内面について掘り下げて考えたことが無い。自分自身の心理的問題が解決していない、あるいはそれを自覚していない。	自分自身の内面について、ある程度の洞察ができている。自己の心理的な問題を自覚しており、その解決に向けて具体的な取り組みを行っている。	自己の本質や性向を理解し、抱えている心理的問題については一定の解決がついている。	自己の本質や性向を十分に理解し、自己の心理的な問題を克服している。教育分析やスーパービジョン等を定期的に受けている。
協力・連携	困った時などに相談できる相手やネットワークがない。情報収集のための手段を持っていない。(あるいは、仕方が分からない。)	信頼できる相談相手やネットワークを構築しようと模索している。必要と感じた場合に情報収集を行っている。	信頼できる相談相手やネットワークがある。継続的に情報収集を行っている。	同業および関連の他職種の人々との専門的なネットワークがある。学会等に所属し、定期的に研究発表や事例報告を行っている。
経営・マネジメント	活動の継続性や、それを支える経営的な問題について考えたことがない。	継続的な活動をめざして努力や工夫をしている。	有償無償を問わず、継続的に活動している。	継続的な活動を実現できており、活動を拡充する見通しもある。
基本理念・ミッション	基本的な理念やミッションが確立していない。それについて考えたことがない。	自分なりの理念やミッションを持っており、ある程度は言語化できている。	理念やミッションが確立しており、他者に明快に説明することができる。	確固とした理念やミッションを持ち、明快な言葉で言語化されている。他者に活動の目的や理想を伝えることができる。

2.3 セルフアセスメントによる改善プロセス



3.1.1 調査の概要

▶概要

1. 絵画教室活動の中でEATを実践しているインフォーマント1名に、3ヶ月の間隔を開けてセルフアセスメントを実施してもらった。
2. インタビューを行い、経時的変化の振り返りや気づきについてヒアリングした。

▶目的

1. 継続的なセルフアセスメントの効果を検証すること。
2. マッピングシート追加の効果を検証すること。
3. セルフアセスメント（ツール、方法）の改善点を明らかにすること。

3.1.2 インフォーマント

▶Aさん

- 絵画教室主宰（生徒数約120名）
- 個人事業主，50代，女性
- 絵画教室歴約28年
- EAT歴約8年

▶Aさんの活動の特徴

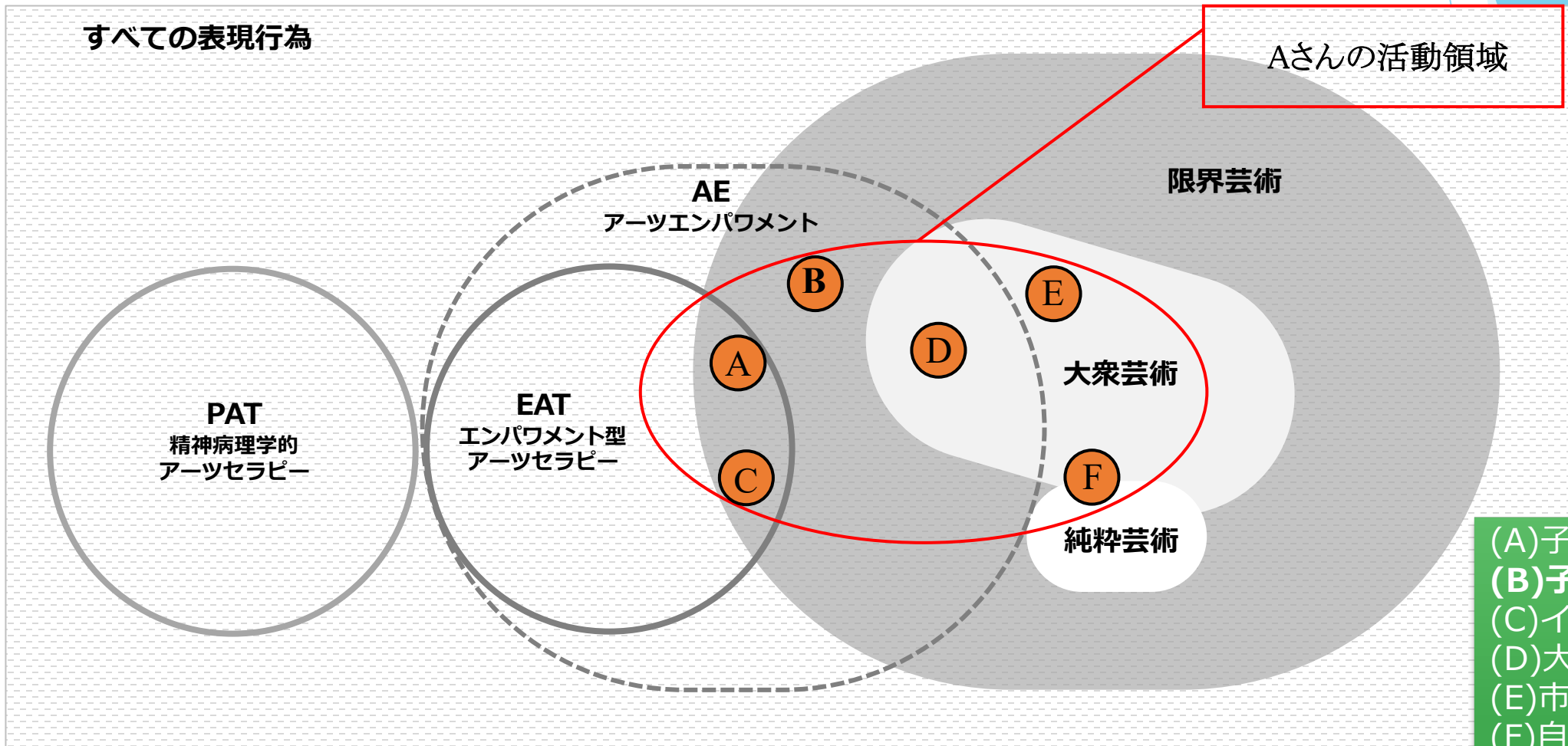
- 一般の絵画教室として活動。課題を抱えた子どもに特化しているのではない。
- 絵画教室の活動の中で，課題を抱えた子どもがいれば個別にEATを実施。
- 平常の教室活動の中でも，子どもに対してEAT的な関わり方を心がけている。

3.1.3 調査方法

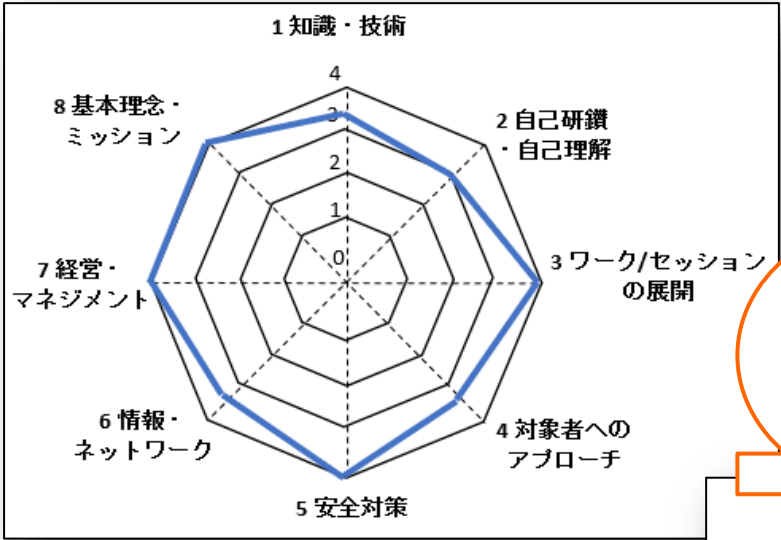
- ① 試行1回目：次の2通りの方法でセルフアセスメントを実施。
 - i. 1- i 回目：EATルーブリックなしに，EAT活動評価シートのみでアセスメント [方法A]
 - ii. 1- ii 回目：EATルーブリックを参照し，EAT活動評価シートでアセスメント [方法B]
- ② 試行2回目：約3か月後，下記の要領でセルフアセスメントを実施。
(試行1回目の際の考察に基づきマッピングシートを追加。)
 - i. マッピングシートを用いて自分の活動領域をマッピング
 - ii. EAT活動評価シートおよびEATルーブリック[方法B]でセルフアセスメント
 - iii. 振り返り用のレビューシート記入
- ③ ヒアリング

3.2.1 Aさんのマッピングシート

【アート/セラピー/エンパワメントの位置関係】

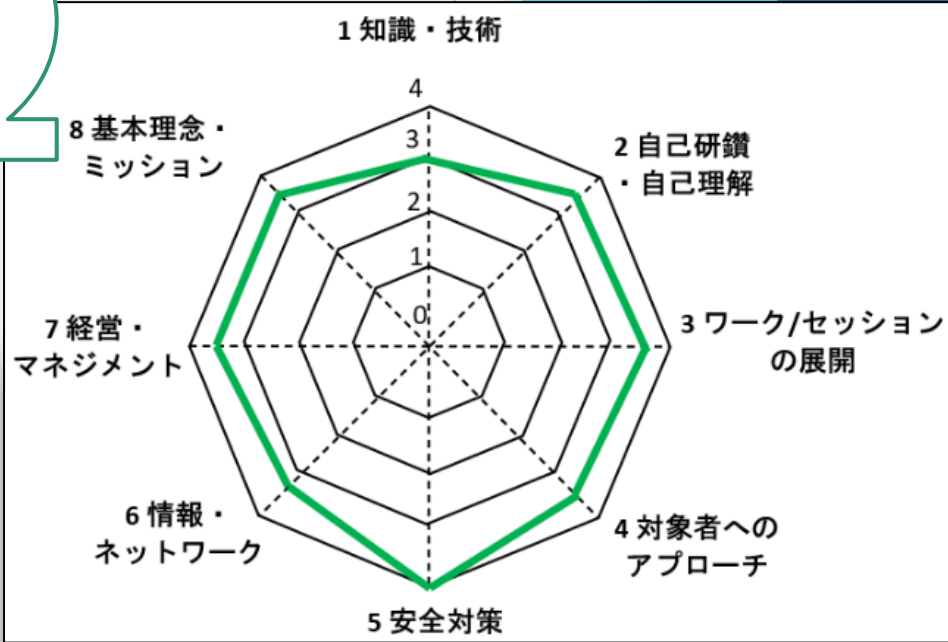
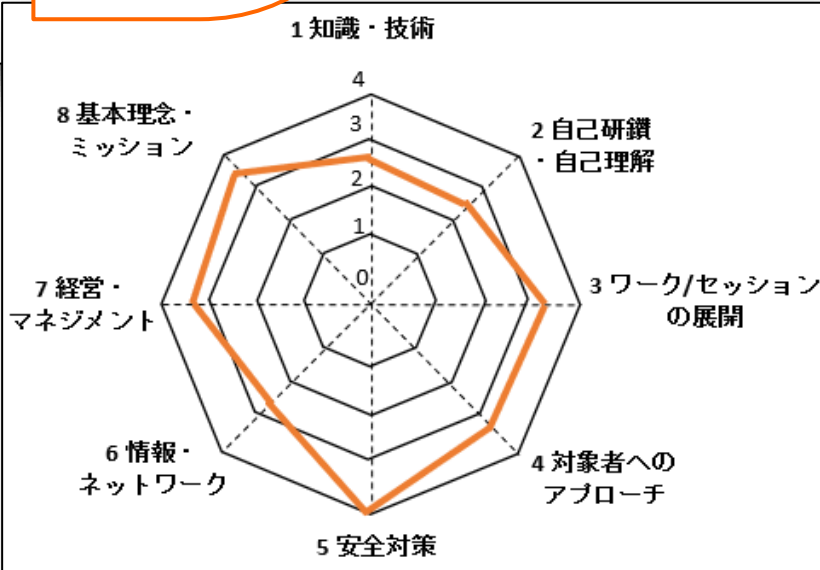


3.2.2 Aさんのセルフアセスメント



同時期に実施

3ヶ月後に実施



セルフアセスメント1-i
(方法A: EATループリック無し, EAT活動評価シートのみで評価)

セルフアセスメント1-ii
(方法B: EAT活動評価シート&ループリックで評価)

セルフアセスメント2
(方法B: EAT活動評価シート&ループリックで評価)

3.2.3 Aさんのフィードバック

- ▶ マッピングは、長年の間に拡大してきた自分の活動を整理し、俯瞰するのに役立った。
- ▶ EAT活動評価シートやEATループリックを通して、今まで意識していなかったことを意識するようになった。
- ▶ 自分の年齢の問題もあり、10年後に引退を考えていた。しかし、セルフアセスメントを通して、これまでのことを思い返し、活動に対するニーズや社会的必要性を改めて自覚した。地域に必要とされていることを考えると、引退への考えも揺れている。体力が続く限りやっていこうという気持ちが出てきている。[将来展望の変化]
- ▶ これまで様々なメソッドを勉強し自分独自のやり方を突き詰めてきた。一方、あまり他と交わらずにやってきたことへの反省もある。改めて自分を磨かなければいけない、勉強し直さなければいけないという思いが強くなった。[自己研鑽への意欲向上]
- ▶ セルフアセスメントは、自分を振り返る機会になった。それまでは求められるまま試行錯誤しながら突っ走ってきて、自分の活動を客観視することがなかった。
- ▶ セルフアセスメントは、第三者的な視点を与えてくれる。自分の中の基準だけでなく、社会的な基準を意識し、活動を俯瞰することは、自分の活動の今後を考える上でも有意義だと思う。

(ヒアリングおよびレビューシート記載内容より)

4.1 セルフアセスメントの有効性

1. マッピング作業は、EAT実践者が自分の活動領域を俯瞰・整理し、それぞれの活動の特性を把握するのに有効である。
2. セルフアセスメントを通じて、EAT実践者はそれまで意識していなかったこと、外的な基準を意識するようになる。それにより自己の活動の捉え方や将来展望に変化が生じる。
3. マッピングやレーダーチャートは、EAT実践者の現状を可視化し、経時的変化を観察する上で有用である。



セルフアセスメントは、EAT実践者が自己の活動やスキルを客観的に把握し、自己認識を深めるために有効である。

4.2 今後の課題

- ▶ セルフアセスメントの事前・事後でどの程度ケイパビリティの変化（改善）があったかは断定できない



- ▶ 属性（経験年数，活動分野等）の異なるインフォーマントを対象とした，より大規模かつ長期間の継続的調査が必要

References

1. 小村みち, 林章浩, “エンパワメント型アーツセラピーの評価手法,” 電子情報通信学会, 信学技報, vol. 121, no. 372, pp. 1-7, Feb.2022.
2. 小村みち, 石原みどり, 林章浩, “ループリックを用いたエンパワメント型アーツセラピーの改善方式,” 電子情報通信学会, 信学技報, vol. 122, no. 167, pp. 16-21, Aug.2022.
3. 小村みち, 石原みどり, 兼子一, 林章浩, “エンパワメント型アーツセラピー実践者のセルフアセスメントにおけるループリック導入の効果,” 電子情報通信学会, 信学技報, vol. 122, no. 282, pp. 33-39, Nov.2022.
4. 石原みどり, 小村みち, 林章浩, 兼子一, “エンパワメント型アーツセラピーのセルフアセスメントの実用化にむけて—エンパワーする人をエンパワーするために—,” 心の危機と臨床の知 (甲南大学人間科学研究所紀要), vol.24, Mar.2023発行予定